

## 教義論題 「化土往生(けどおうじょう)」

### 化身土文類」に顕される化土往生について

(はじめに)

平成 22 年は、安居(あんど)で「三経隠顕(さんぎょうおんけん)」が会読(かいどく)の対象となり、宗学院別科では「ご本典(下)」で「化土往生」が課題として提示され、期せずして、ご本典は『化身土文類(けしんどもんるい)』に親しませて戴く一年となった。

嘗て、平成 18 年度の安居では、梯 實圓和上が本講師として「顕浄土方便化身土文類」を講讃なされた。そのみ跡を慕い、ご苦労の後をお訊ねして、末学末端を汚す印としたい。

ここでは、日頃の「りびんぐらいぶず」と異なり、噛み砕いた表現を取る暇(いとま)がないので、ただ、筆致のリズムをお楽しみ戴ければ幸いである。

#### 題意

「化土往生」とは、弘願(ぐがん)を疑う行者の自力執心を強ちに否定せず、報仏土中の化土に行者を受け容れて、仏智不思議を領納する信心の智慧を開かしめる調機誘引の為の如来の悲心に基づく浄土往生をいう。

#### 出拠

(第十九願)設我得仏 十方衆生 發菩提心 修諸功德 至心發願 欲生我国 臨壽終時 仮令不与 大衆圍繞 現其人前者 不取正覚 「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、菩提心を発し、もろもろの功德を修して、至心發願してわが国に生ぜんと欲せん。寿終るときに臨んで、たとひ大衆と圍繞してその人の前に現ぜずは、正覚を取らじ。」

(Ref『仏説無量寿経』、註 P18)

(第二十願)設我得仏 十方衆生 聞我名号 係念我国 植諸徳本 至心回向 欲生我国 不果遂者 不取正覚 「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、わが名号を聞いて、念(おもい)をわが国に係(か)け、もろもろの徳本を植えて、至心回向して、わが国に生ぜんと欲せん。」

(Ref『仏説無量寿経』、註 P18)

眞假皆是酬報大悲願海、故知報佛土也良假佛土業因千差、土復應千差、是名方便化身・化土。由不知眞假迷失如来廣大恩徳

「眞仮みなこれ大悲の願海に酬報せり。ゆゑに知んぬ、報仏土なりといふことを。まことに仮の仏土の業因千差なれば、土もまた千差なるべし。これを方便化身・化土と名づく。眞仮を知らざるによりて、如来広大の恩徳を迷失す。」

(Ref『眞佛土文類』全 P141、註 P372)。

## 釈名

「化土」とは、自力による各別の因を修する行者各々の往生を遂げることを誓われた(第十九願、第二十願)因願酬報の土をいう。

「往生」とは、現生の命終って後の土に往生生まれることをいう。

「方便」とは、衆生救済の仏の巧みなお手立てをいい、真実と権仮とがある(Ref 註釈版「補注 15」初版 P1568)。

「随自意(ずいじい)の法門」とは、仏の本意に叶って用いられる教化法をいう(Ref 註釈版「補注 15」初版 P1568)。

「随他意(ずいたい)の法門」とは、仏の随自意真実の法門を直ちには受け取れない未熟な機の機根に依じて仮に暫く誘引の為に用いられる法門をいう。機が熟すれば真実の法門に入らしめて還って廃されるので権仮方便の法門と称する(Ref 註釈版「補注 15」初版 P1568)。

(参)「六三法門(ろくさんぼうもん)」(Ref 梯 P190)。

三願	三教	三門	三蔵	三機	三往生	土
第十八願	大經	弘願	福智蔵	正定聚	難思議往生	真実報土
第十九願	觀經	要門	福德蔵	邪定聚	双樹林下往	方便化土
第二十願	小經	真門	功德蔵	不定聚	難思往生	方便化土

## 義相

### 阿弥陀如来、釈迦如来の説相

第十八願の法門は、弥陀・釈迦二尊の随自意真実の法門である。これに対して、第十九願、第二十願の法門は、随他意権仮(ごんげ)の法門である。自力往生を願う者にも斯る両願を生因(しょういん)の願としてお誓い下さったのは阿弥陀如来の悲心に基づく。

一方、釈迦如来は、第十九願の意を受けて『觀經』を、二十願の意を受けて『小經』を御説き下さった。両教には隠顕があり、顕にはそれぞれ定散二善の自力諸行往生、自力念仏往生が説かれてあるも、經の底意としては大經弘願の念仏往生を御説き下さっている。これを顕彰隠密という。

### 仮の仏土(化身土)とは何か

宗祖は「真仮みなこれ大悲の願海に酬報せり」とされる(Ref 『眞佛土文類』全 P141 註 P372)。『教行信証』の用例では「大悲の誓願」とは必ず真実願を顕し、「悲願」とは方便願の呼称であって「大悲の願」とは称されなかった。

これより「大悲の誓願」に酬報したとは、第十八願(選択本願)成就の真実報土を言うこ

とになる。

そうすると「真仮みなこれ大悲の願海に酬報せり」とは真土と化土の二種の浄土を建立されたことではなく、阿弥陀仏による願力成就の報土は唯一、真報仏土であるけれども、未熟の機の惑見によって化土が成立することを表されたとしなければならない(Ref 梯 P236)。

よって、化土とは報仏土中の化土ということになる。

かくして、方便化身土とは、自力の機が其々に思い描く浄土を強ち拒絶せず、これを調育し、真実報土に誘引する場をいう(Ref 梯 P237)。

### 三願の構造対比

願	信	行	果
第十八願	至心に信樂して我が国に生まれんと欲え	乃至十念せよ	若し生れずは正覚を取らじ
第十九願	至心に発願して我が国に生まれんと欲へ	菩提心を発して諸の功德を修する	臨終に来迎する
第二十願	至心に回向して我が国に生れんと欲え	我が名号を聞き念を我が国に係け諸の徳本を植える	往生を果遂する

第十八願には、「至心に信樂して我が国に生まれんと欲え」という信心と、「乃至十念せよ」という行と、その信行の因に対して「若し生れずは正覚を取らじ」の往生の果が誓約されており、

第十九願には、「菩提心を発して諸の功德を修する」という行と「至心に発願して我が国に生まれんと欲へ」という信と、その因に対して「臨終に来迎する」果とが誓約されており、

第二十願には、「我が名号を聞き、念を我が国に係け、諸の徳本を植える」行と「至心に回向して我が国に生れんと欲え」という信とが誓われ、その因に報いて「往生を果遂する」果とが誓約されている。

何れも浄土往生の生因願であり、行者其々の機根に対して、各別の行信因果が誓願されたものである(Ref 梯 P29)。

## 親鸞聖人の願海真仮論(三願真仮論)

### 真仮三願の体系

願	性格	往生	果
第十八願	真実弘願	他力念仏往生	弘願
第十九願	権仮方便	諸行往生	要門
第二十願	権仮方便	自力念仏往生	真門

宗祖は、第十八願を真実弘願と見る一方、第十九願、第二十願を権仮方便の法門と御覽遊ばした。三願に真実と方便の違いを見る三願観は、宗祖独自のものである。

しかして、第十九願、第二十願は、第十八願において選捨した自力の行法に立つ未熟の機を強ち否定せず(随他意)、これを調育する為に暫く用いる誘引の法門であるから、機根が熟して真実弘願の法門に転入させる段階で還って廃捨される(暫用還廃)(Ref 梯 P7-8)。

#### その一、第十九願の往生(双樹林下往生)

宗祖は、第十九願は、菩提心を発して、諸行を修し、此土で悟らんとした聖道門の機が此土での修行成就を断念して浄土願生心を発した場合にあっては、臨終に来迎して往生せしめようと誓われた願と御覽遊ばした(Ref 梯 P30)。

その当分は、定散諸行の機を臨終に来迎し方便仮土へ往生せしめる諸行往生を誓うも、その底意は、聖道門の機を暫く機根に応じて(随他意)、調育誘引して遂には浄土門に入らしむる権仮方便の意義を有する(Ref 梯 P31)。

その益は、現生では摂取不捨の利益に与れず、当来は真実の三宝を見聞できない失を示して、辺地、懈慢界、胎宮等の方便仮土と称せられる。

方便としての役割は、聖道の機をして浄土を欣慕せしめる調機誘引にある。したがって機根が熟すれば、権仮方便の法を廃捨して終には真実に帰入せしめようとする仏の大慈悲心の作用である。

よって、第十九願(第二十願も)は真実五願とは異なり「大」の字こそ付されぬものの、「悲願」と称せられる。先哲はこれを「願相は権仮、願底は真実」といわれる。(Ref 『化身土文類』「すでにして悲願います」註 P375、P399、「如来の異の方便、欣慕浄土の善根なり」『化身土文類』註 P382)。

## その二、第二十願の往生(難思往生)

「植諸徳本」の「諸徳本」について

「徳本」とは如来の尊号なり。徳号は一声称念するに、至徳成満し衆禍みな転ず、十方三世の徳号の本なり。ゆゑに徳本といふなり(『化身土文類』真門釈、註 P399)

「諸徳本」とは、諸功德の因(本)だから一般には諸善諸行を指すが、宗祖は、阿弥陀仏の徳号だと見られた。

阿弥陀仏の名号には、如来成就の万徳が円満しており、それを戴いて称える者に至徳を成満させ、衆禍を転換させる働きを有しているからである。

十方三世の諸仏はこの働きによって仏陀たらしめられたから、弥陀の名号は、一切諸仏の徳号(名号)の根本であるという意味で「諸徳本」とされたのである。

「植」とは、功德を積み重ねる意味(積植)を表すから、名号を称えて功德を積み重ねようとする自力念仏を「植諸徳本」だとされたのである(Ref 梯 P32～33)。

### 仏智疑惑の善人の有様

大経には、「もし衆生ありて、疑惑の心をもって諸々の功德を修して、かの国に生まれんと願わん。…この諸智において疑惑して信ぜず、しかるになほ罪福を信じ、善本を修習して、その国に生れんと願ふ。この諸々の衆生、かの宮殿に生れて、寿五百歳、つねに仏をみたてまつらず、教法を聞かず、菩薩・声聞の聖衆を見ず、このゆゑに、かの国土においてこれを胎生といふ」(Ref『大経』「下」P76)とある。

幸いに本願の名号を聞き得ているのに、却って如来より賜りたる本願力廻向の名号を己の造る善根と取り誤って、称名の功を募り、その善根功德を回向して浄土往生を願う者は問題である。

その本質は、不思議の仏智を疑惑し、善因楽果、悪因苦果という自業自得果の因果の道理のみを信じている姿に他ならないからこれを自力念仏者と見られた。

斯る自力念仏者は、難思往生と言う方便仮土に受け入れ、必ずや弘願真実の浄土に生れさせずにはおかないというのが仏の本意である(果遂の誓い)。

よって、仏智不思議を疑う罪を深く自ら悔責(けしゃく)して本願力に帰すれば直ちに真実報土に転入するとされる(Ref 梯 P35)。仏の悲願のたまものである(Ref『化身土文類』「すでにして悲願います」註 P399)。

化土往生を設けられた理由は、**真実報土の往生を明らかにする為であった**

「念仏成仏これ真宗 万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして 自然の浄土をえぞしらぬ(『大経讃』)」と宗祖は、謳われた。

これは**権実真仮**を峻別して初めて弘願真実の教を信知できることを意味する。

本願他力に帰することを示されたとしても、行信の主体が自らだと計らう間は、無上涅槃の「自然の浄土」は開けない。

なぜなら自業自得の因果を行う主体は行者自身であるのに対して、自然法爾の無上涅槃を開く行信の真の主体は飽くまで如来の本願力だったからである

したがって、真実と権仮方便の問題(三願真仮論)は、行信の主体の転換(回心)を迫る厳しい教説であったことがわかる。

宗祖が「真仮を知らざるによりて、如来広大の恩徳を迷失す(Ref『真仏土文類』註釈版 P372)」といわれた所以である(Ref 梯 P68)。

## 考察

### 権仮方便を御説き下さった理由

古来、仏教一般に共通した思考形態は、七仏通誠偈に説かれる自力の行信因果による救済であった。

諸悪莫作(もろもろの悪は作すことなかれ)、

衆善奉行(もろもろの善は奉行せよ)、

自浄其意(自らそのこころを清くせよ)、

是諸仏教(これ仏教の教えなり)。

一方、他力念仏往生の救いは、病める者を偏に阿弥陀仏の大悲の必然として救う医療的救済観に立脚する。

しかしながら、法然聖人により明らかにされた「順彼仏願故」の趣旨は、当時、仏教の基本的な枠組みをはみ出した異端と誤解された(Ref『興福寺奏状』)。

なぜなら、行者往生が仏の本願に基づくという「順彼仏願故」のみを以てしては救済の原動力のコペルニクスの転回は願文文言上明確ではなかったからである。

そこで、宗祖は、如来大悲の必然である自然法爾の救済構造(救済の主体は如来)は、本願力廻向に立脚する旨を以て明確化されたのであった。その上で、尚、両者の相違を明確化する為に、自業自得の因果論の延長線上に立つ浄土教の救済観を権仮方便として対比されたものと解される。(Ref 梯 P61)。

### 三願転入の意味するところ

化土往生の法門は、自力行者をして弘願真実の往生に調機誘引する暫用遺棄の過程(プロセスアプローチ)である。即ち、自力の機を強ちに否定せず、一旦報中に権仮方便の土を設けてこれを受け容れ、調育して弘願真実の法門に至らしめる如来悲心の過程である。

斯る構造的・ダイナミックな過程にこそ、今日、固定的平面的な説きぶりの疾に陥ったご常教の殻を打ち破って、弘願真実のみ教えを現代社会に実践的に展開して行くことのできる多くの可能性が示されているとみななければならない。

### 結論

「化土往生」とは、弘願(ぐがん)を疑う行者の自力執心を強ちに否定せず、報仏土中の化土に行者を受け容れて、仏智不思議を領納する信心の智慧を開かしめる調機誘引の為の如来の悲心に基づく浄土往生をいう。

### 参考文献

真宗聖教全書(略称「全」)、

注釈版聖典初版(略称「註」)、

梯實圓著、永田文昌堂刊「顕浄土方便化身土文類講讃」(略称「梯」)以上

合掌

正覚寺仏壮例会 毎月第一日曜日午後八時より

正覚寺仏婦例会 毎月十六日午後七時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内)

〒520-0501 大津市北小松四五二番地 077-596-0166、FAX077-596-0196 住職堅田 玄宥

[この程、如上の通り、ファクシミリ番号を電話番号から独立させております。](#)